

昭島礼拝 2020/4/12

聖書：マルコ 16:1-7

主題：復活の主に会う

賛美：

みなさん、おはようございます。イースターおめでとうございます。今日も各御家庭での礼拝にはなりますが、復活の主の御前で礼拝できますことを感謝します。私たちはこの肉体の健康に配慮して、会堂に集うことを止めていますが、イエス様はどこにでもおられるお方です。ですから私たちはどこでもイエス様を礼拝する事ができます。そして今日は特に、イースター、復活されたイエス様を覚える礼拝です。私たちの罪の贖いのために十字架に架かって命を落としてくださいましたが、三日目に復活されて、今も生きておられるイエス様に感謝します。それぞれ置かれている場所で、神様を心からほめたたえたいと思います。聖歌隊のみなさんがこの日のために練習して下さっていましたが、残念ながら今日はできませんでした。日を改めて、皆さんと会堂に集まって礼拝をもつときに賛美をして頂ければと思います。

マルコの福音書のシリーズも今日で最後となります。一つの物語の大団円ですね。どんな物語でも、ラストはその物語を通して一番伝えたいことがラストに描かれる物です。4つの福音書すべてに共通していますが、福音書のラストはイエス様の十字架と復活こそ、福音書が伝えたいことであり、私たちに与えられた福音、グッドニュースです。

先週、イエス様の十字架のお話を見ました。今日はその三日目の朝、日曜日の朝の出来事になります。イエス様が十字架に架けられたのは、金曜の朝でし

た。そして金曜の午後、夕方近くに、イエス様は十字架で息を引き取られました。イスラエルでは、一日の始まりを日没としています。日没で日付が変わるという文化があります。これは旧約聖書創世記に、「夕があり、朝があった。第一日。」というような記述があるからです。一日というのは、夕方があって、朝があるというのが一日の区切れ目なんだとイスラエルの人たちは理解したということです。私たちの感覚では、朝が来て、夜が来るとというのが一日の区切れ目という感覚ですが、どちらがいいか悪いかではなく、ちょっと違う文化という事ですね。話を戻しますが、イエス様が十字架で息を引き取られた時、金曜の夕方近くだったということは、もうあと数分から数十分で土曜日になるということです。イスラエルでは土曜日は安息日ですから、仕事をしてはいけません。イエス様の埋葬ができなくなってしまいます。そこで、アリマタヤのヨセフという人が急いで、簡略的にイエス様をお墓に埋葬したという事がマルコ 15章の終りに書かれています。その様子を女性たちが見ていました。

そして安息日はそれぞれの自宅で過ごし、安息日が開けて、日曜日の朝、女性たちはお墓に行きました。16:1にマグダラのマリアと、ヤコブの母マリアと、サロメと書かれていますね。彼女たちは「イエスに油を塗りに行こう」と思ったと書かれています。金曜の夕方の埋葬だけでは不十分と思ったのか、それとも自分たちもちゃんとイエス様のお体に油と香料を塗ってお別れをしたいと思ったのか、詳細は分かりません。油と香料は買って用意しました。しかしお墓は大きな重たい石で蓋がしてありますから、誰かその石をどけてくれる人がいるかしら？なんて話しながらお墓に行ったことが書かれています。

ところが、お墓についてみると、それどころではない事になっていました。それまでとは全く違う状況になっていたのです。お墓に行くと、石はもうすでにどけてありました。とても大きくて重たい石なのですが、それをどかしたと思われる人影もありません。代わりに一人の青年が石の側に座っていました。「真っ白な衣をまとった青年」と聖書は記しています。他の福音書の記述と併

せて考えてみますと、この青年は御使いです。聖書の中で御使いは、いろいろな姿で現れますが、この時は「真っ白な衣を着た青年」だったのでしょう。お墓にやって来たのが女性たちだったので、イケメンの姿で現れたのか、それはどうか知りませんが、おそらくこの女性たちからみて、とてもこの青年一人ではこの大きな重たい石をどけられるとは思わなかったでしょうね。女性たちは何がどうなっているのか分からなくて驚き、戸惑っていました。

青年は女性たちに声をかけます。『青年は言った。「驚くことはありません。あなたがたは、十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのでしょうか。あの方はよみがえられました。ここにはおられません。ご覧なさい。ここがあの方の納められていた場所です。』」イエス様を探しているのでしょうか？イエス様はここにいないですよ。復活されましたから。お墓の中を見てごらんください。御使いは女性たちに声をかけます。女性たちがお墓の中を見ても、確かにイエス様のご遺体がありません。イエス様は復活されたのです。16:6で御使いは「あの方はよみがえられました。」と話しています。ギリシャ語の聖書本文では、この言葉は受身形になっています。ですからあえて受身形の日本語に変えるなら、「あの方はよみがえらされました。」ですね。だれによって？神様によってです。神様がイエス様をよみがえらせたのです。神様の力、いのちによってイエス様は復活されたのです。人々の罪の刑罰としてイエス様は十字架に架けられて、命を落としました。死なれました。罪の刑罰は死です。そして普通、死んだ者はそこで終わりです。死によってすべての者は服従させられると言っても良いでしょう。死は何者よりも強く、人を支配下に置きます。だから私たちは死を恐れます。しかしイエス様は復活されたのです。つまり死を打ち破りました。神様の力、神様のいのちが死を打ち破ったのです。もはや死の支配がイエス様を捕らえることは出来ません。そして神様は、イエス様を復活させたと同じ、力といのちをもって、信じる者たちを救って下さいます。死の支配から解き放ってくださいます。

イエス・キリストがこの地上世界に人間として住んでおられたことは事実です。多くの人がイエスという人間がいたことを証ししています。イエス様をキリストと信じない人であっても、イエス・キリストという人物がいたことを証言しています。私たちはこの地上に生きた人であれば、いつかは地上での生涯を終えて、必ずどこかに遺体が残るという事を知っています。そしてちゃんと埋葬されていれば、誰それさんのお墓という形でお墓が残り、そこに遺体が残ります。家族であったり、有名人であったり、すでに亡くなっている方を覚える時、私たちはその人のお墓に訪れます。そして「〇〇さん。ここに眠る」というような墓標を見ます。お墓参りをしてその人にあつたような気になりますね。そしてお墓の前で心の中でお話したりします。

しかしイエス様のお墓の場合、ちょっと違います。お墓の場所はここだろうという場所があるのですが、そこにイエス様の遺体はありません。そしてお墓にはこう書かれています。「ここにはおられません。よみがえられたからです。」だから私たちは戸惑うかもしれません。イエス様にお会いしたいと思ってきたのに、じゃあ、どこに行けば会えるのですか？と思うかもしれません。マルコ16:7で青年は言いました。「さあ行って、弟子たちとペテロに伝えなさい。『イエスは、あなたがたより先にガリラヤへ行かれます。前に言われたとおりに、ここで会いできます』と。」お弟子さんたちに伝えなさい。イエス様は皆さんより先に、ガリラヤへ行かれます。前々から話していたでしょう。そこで会いできます。だって、イエス様は生きておられるのですから。お墓にいない、死んでいないという事は、生きているという事です。お弟子さんたちは今まで何日もイエス様と一緒にいました。一緒に旅をして、お食事して、おしゃべりして、寝泊まりして、たくさんのことを教えてもらい、奇跡を見てきました。十字架でイエス様は確かに命を落とされました。一度死なれました。しかしそれがなんだというのでしょうか。イエス様は復活されたのです。もはや死はイエス様をお墓につなぎ留めておくことは出来ません。イエス様は今、生きておられ

るのです。生きておられるという事は、また皆さんと一緒に会えるということではありませんか。だから喜んでイエス様に会いに行きなさいと御使いは語りかけたのです。

そしてこの出来事があってから約 2,000 年、未だに「再びイエス様は死んだ」というニュースはありません。イエス様のお墓は空っぽのままです。では私たちはどこに行けばイエス様に会えるのでしょうか？どこでも会えるのです。イエス様についてまだ再び死んだというニュースが入っていないという事は、今も生きておられてお会いできるという事です。そしてイエス様は神様であって、どこにでもおられるお方なので、どこでもお会いする事ができます。お祈りの内に、聖書を読むうちに、礼拝のうちにイエス様とお会いできます。その礼拝も会堂である必要はありません。町中であっても、おうちであっても、私たちイエス様を慕い求める人たちが「イエス様！」と一言呼びかけるだけで、そこにイエス様はいて、私たちの話を聞き、恵みを与えて下さいます。この復活のイエス様にお会いすること、それこそが福音書が伝えたいグッドニュースです。有名人には中々会うのが難しいかもしれません。ミッキーマウスに会って握手をするのも大変です。死んだ人ならなおさら会話は難しく、お墓に行くのも大変です。しかしイエス様は生きておられて、どこにでもおられて、私たちと会うのを心待ちにしています。マルコの福音書は 1:1 でこのように始まっていました。「神の子、イエス・キリストの福音のはじめ。」福音書が伝えたい福音は、イエス様のご生涯のこと、それもそうです。しかしそのイエス様に今でも、いつでも会えるということ、これが最大の福音と言えるかもしれません。ですからこの福音書は 16 章あって長い本になっていますが、それは福音、グッドニュースの始まりに過ぎません。この後、イエス様と多くの人との出会いがありました。そしてイエス様と私たちの出会いは今この時から始まる人もいるでしょう。イエス様とお会いし、お弟子さんたちがイエス様と一緒に過ごされたように、私たちもイエス様と一緒に過ごしてまいりたいと思います。